

治罪法全訓集第七卷

同法省記錄文庫  
保  
第五百七十號  
十四冊內

第五號  
第一架  
第六

司法省  
第十九號  
寄贈圖書文庫

司法省記錄文庫  
第一一號

XB 620  
T 6  
8 8





XB 620	
T	6
8	8



第五節 檢證及物件差押  
第六節 證人訊問  
第七節 鑑定  
第八節 現行犯豫審

治罪法令訓集 第三編 三



警察官行政ノ處  
 八カラ以テ死ニ屍ヲ檢視  
 シ犯罪アルヲ認知  
 又ハ思料シタルキハ  
 捜査ノ處分ヲ為  
 シ檢視明細書及  
 ヒ証憑書類ヲ檢事  
 ニ送致ス

兵庫縣 十四年十月八日同  
 同年三月廿日付 刑法第四百二十六條第九

第五節 檢證及ヒ

項ニ變死人ノ檢視ヲ受ケスレテ埋葬シタル者トアリ

物件差押

其被殺自殺ヲ問ハス官ノ檢視ヲ經ルハ論ヲ俟タ

第五百十八條 豫審判事

ス而シテ其自殺 刑法第三百二十條 第三百三十條ノ犯者無之  
 場合及ヒ縊死溺死トモ被殺ノ景状キ場合ノ

ハ事實發見ノ為ノ必要  
 ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ

如キハ固ヨリ犯罪ニ原因セサルヲ以テ治罪法ニ從ハス

犯行ニ臨ミ檢證ヲ為ス可  
 シ

行政ノ處分ニ止ルヘント虽モ其被殺ノ如キハ縱令數

又檢事ノ請求アリタル

月ヲ經過シタルモ死屍アルキハ非現行ナルヲ以テ檢

時ハ如何ナル場合ト雖モ

視處分ハ尚ホ治罪法ニ從ヒ豫審判事ノ權内屬

臨檢ス可シ

スルハ勿論ニ有之候哉「指令」警察官行政ノ處分

ヲ以テ死屍ノ檢視シタル場合ニ於テ犯罪アルヲ

認知シ又ハ思料シタルキハ捜査ノ處分ヲ以テ檢視

明細書及ヒ其他ノ証憑書類ヲ檢事ニ送致ス

ハシ

檢證及ヒ物件差押 第五百五十八條

檢證及ヒ物件差押 第五百五十八條

同 法 第 五 節



巡査檢証處分ヲ  
為スルヲ得ス然レモ  
証憑ノ原態ヲ保  
存スルニ注意シ口  
述又ハ書面ヲ以テ  
之ヲ証明ス

千葉縣 十四年十二月十日同  
十五午一月廿四日同 巡査其職務ヲ行フニ  
當リ闕政其他現行犯ヲ見認メ被告人ヲ捕獲スル  
場合ニ於テ其犯跡等即時檢証處分ヲ為サレハ  
證據湮滅ノ恐アル者ハ臨機巡査ラシメ假ニ檢  
証處分ヲ為サシムルモ不苦儀ニ候我「指令」  
巡査ハ檢証處分ヲ為スルヲ得ス然レモ証憑ノ  
原態ヲ保存スルニ注意シ口述又ハ書面ヲ以  
テ之ヲ証明スルヲ得

巡査現行犯ヲ逮捕ス  
ル場合ニ於テ其他  
ニ現在スル證據物  
件ハ押収不苦

（理由）檢証ノ事務ハ法律上豫審判事ノ任ニシテ其目法警  
察官ニ此事務ヲ許スル現行犯ノ場合ニ限リ故ニ法律ニ  
依リ之ヲ証言スレハ巡査ニ於テハ決シテ檢証處分ヲ為スルヲ得サ  
ル者トス然レモ同面ノ如ク即時檢証ヲ為サルヲ得サル者巡  
査ニモ之ヲ許サルヲ得ス然ルヲ前陳ノ如ク檢証トシテ之  
ヲ許スルヲ得サルヲ以テ暫ク本指令ニ及ヒ置カレントス  
福岡縣 十四年十一月九日同  
十五年二月廿四日同 巡査現行犯ヲ逮捕スル場  
合ニ於テ其犯處ニ現在スル證據物件ハ押収不苦乎

「指令」 同之通

檢證及ニ物件差押 第百五十八條ノ二



檢證及物件差押

同  
法  
省

司  
法  
省



第五百十九條 豫審判事  
 ハ犯罪ノ性質方法日時  
 場所及ヒ被告人ノ人違  
 ナキコトヲ證明ス可キ摸  
 様ニ付キ調書ヲ作ル可  
 シ  
 又被告人ノ利益ト為ル  
 可キ摸様ヲモ記載ス可  
 シ



第百六十條 豫審判費  
 臨換ノ場所ニ於テ在見  
 シタル物件其出所及ヒ  
 模様ニ因リ被告人ノ人  
 違ナキト又ハ犯罪ノ模  
 様ヲ知ルニ足ル可シト  
 思料シタル時ハ之ヲ差  
 押ヘテ認印ヲ為シ目錄  
 ラ作ル可シ但其物件ヲ  
 監護シ又ハ遞送スルハ  
 書記之ヲ擔任ス可シ



--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

有守者ヲ置クハ巡查  
 長ヲ用ル能ハサルハ相  
 留ト思科スル者ヲ以テ看  
 守セシム又給料ハ裁判  
 所ト等シク處分ス

弘前始審廳判事十五年一月十七日請訓 全年二月八日訓示 治罪法第百  
 第六十一條 豫審判事

六十條 豫審判事ハ、云々中畧 右ノ看守ハ時宜ニ依リ  
 巡查又ハ戸長ヲシテ看守セシクル者ナラニ果シテ然

ルハ当地ノ如キ巡查僅少ニテ速モ又儀ニ到リ兼  
 又戸長モ不在等ニテ用フル可ハサル場合ニ於テ  
 何人ヲ向ハス豫審判事ノ信認スル所ノ者ニ看守  
 セシメ相当ノ日當ヲ給與シ可然哉 訓示 豫審判  
 事物件差押ノ際巡查戸長ヲ用フル可ハサルハ

ハ請訓ノ通相當ト思科スル者ヲ以テ看守セシム  
 其給料ハ裁判費用ト等シク處分スヘシ

検査及ヒ物件差押 第百六十一條  
 司法省



第百六十二條 豫審判事  
ハ被告ノ住所又ハ事  
実ヲ證明ス可キ物件ヲ  
藏匿スルノ疑アル者ノ  
住所ニ臨検スルヲ得  
被告又ハ物件ヲ藏匿  
スル者其住所ニ在ラサ  
ル時ハ同居ノ親屬若シ  
其在ラサル時ハ戸長ノ  
立會アルヲ要ス  
第百三十三條第三項ノ  
規則ハ本條ニモ亦之ヲ  
適用ス




臨檢家宅搜索ノ  
處分ニ檢察官其  
職權ヲ以テ立會ヲ  
得

(仙臺裁判所判事

十三年十月十日請訓  
十四年七月廿三日訓示)

第一百六十三條

第一百六十三條

被告人ハ

中民事原告人及ヒ其代人ハ前ニ記載シタル處

臨檢家宅搜索ノ處分

分ニ立會云々トアリテ檢察官ノ立會ヲ得ル

ニ立會ヒ又ハ代人ヲ以テ立

明文ナキニ付其立會ヲ許サル者歟或ハ

會ハシムルヲ得

誤條ニ明文ナキモ其職權ヲ以テ立會フコ

若シ被告勾留ヲ受ケ

ク得ヘキ裁「訓示」後項見込ノ通

タル時ハ自ラ立會フコ

ク得ス但豫審判事本

人ノ立會ヲ必要ナリトス

ル時ハ此限ニ在ラス

民事原告人及ヒ其代人

ハ前ニ記載シタル處分ニ

立會フコヲ得但豫審

判事ハ其立會ノ為ソ



豫審ヲ遅延ス可カラ  
ス

第百六十四條 家宅搜索  
ノ場合ニ於テ豫審判事  
ハ第百六十條ノ規則ニ  
從ヒ物件ヲ差押フ可シ  
物件ヲ差押ヘタル時ハ  
其目錄ノ謄本ヲ立會  
入ニ渡ス可



第百六十五條 豫審判事  
 ハ被告人物件差押ノ  
 處分ニ立會ヒタルト否ト  
 ラ問ハス其物件ヲ被告  
 人ニ示シ辯解ヲ為サ  
 シム可シ  
 其訊問及ヒ陳述ハ之ヲ  
 調書ニ記載ス可シ



第百六十六條 豫審判事  
 ハ臨檢ノ場所ニ於テ證人  
 ノ陳述ヲ聽クヲ必要ナリ  
 トスル時ハ書記ノ立會ニ依  
 リ各別之ヲ訊問ス可シ  
 第百七十條以下ノ規則ハ  
 本條ニモ亦之ヲ適用ス

檢證及ヒ物件差押 第百六十六條



第百六十七條 豫審判事  
 ハ前數條ニ記載シタル處分  
 中何人ニ限ラス允許ヲ得ル  
 ニ其場所ニ出入スルヲ禁  
 スルヲ得  
 若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ  
 之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ル  
 マテ之ヲ留置スルヲ得




司法警察官の罰金ヲ言渡スルヲ得ス

司法警察官囑託ヲ受ケタル事件ニ限リ鑑定人ヲ命スルヲ得ルモ其命令ニ應ゼル者ニ對シ罰金ヲ言渡スルヲ得ス罰金ヲ言渡スヘキ者ハ輕罪裁判所ニ公訴ス

石川縣	十四年十二月廿六日付	本年第四百六号公布	第百六十八條	豫審判事	ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ因リ臨檢家宅搜索ノ事ヲ其地ノ治安判事ニ囑託スルヲ得		
第六項治罪法第百六十八條第百七十二條ノ例	ニ依テ司法警察官其囑託ヲ受ケタル豫審判事ノ行フヘキ一切職權ヲ行ヒ得ヘキ哉	「指令」同	長崎縣	十五年一月十一日付	同年四月十六号御布告	十四年九月第拾六号布告	治罪法第百六十八條第百七十二條ニ於テ治安判事ニ囑託スルヲ許シ其處分ハ當分内其地ノ司法警察官ニ囑託スルヲ得
司法警察官囑託ヲ受ケタル事件ニ限リ鑑定人ヲ命スルヲ得ルモ其命令ニ應ゼサルハ罰金申渡可然候哉	「指令」囑託ヲ受ケタル事件ニ限リ鑑定人ヲ命スルヲ得ルモ其命令ニ應ゼサル者ニ對シ罰金ヲ言渡スルヲ得ス	但罰金ヲ言渡スヘキ者ハ輕罪裁判所ニ公訴スヘシ	檢證及ヒ物件差押	第百六十八條			

檢證及ヒ物件差押 第百六十八條



檢證及物件差押

陶  
器  
類

陶  
器  
類



第百六十九條 豫審判事ハ  
 事實発見ノ為ニ必要ナリト  
 スル時ハ驛遞電信鐵道  
 ノ官署諸會社ニ其事由ヲ  
 通知シ被告又ハ豫審ニ  
 關係アル者ヨリ發シ若クハ  
 是等ノ者ニ對シ發シタル書  
 類電報又ハ物件ヲ受取附  
 披スルヲ得但受取證書  
 ヲ渡ス可シ  
 前項ノ書類物件不用ニ屬  
 シタル時ハ其官署又ハ會社  
 ニ還付ス可シ

檢證及ニ物件差押  
 第百六十九條



第六節 證人訊問

第七十條 豫審判事

檢事民事原告人及被

告人ヨリ證人トシテ指名

シタル者ヲ呼出ス可シ

原告證人被告證人ノ員數

夥多ナル時ハ指名ノ順序

ニ從ヒ又ハ最モ事實ヲ知

ル可シト思料シタル者輕罪

事件ニ付テハ各五名重罪

事件ニ付テハ各十名ヲ限リ

先ツ之ヲ呼出ス可シ但事

實發見ノ為ノ必要ナリト



スル時ハ此限ニ在ラス  
又原被ノ指名セサル者ト  
雖モ豫審判事ノ職權ヲ  
以テ證人トシテ之ヲ呼出  
スコトヲ得

仙臺裁判所判事

十三年五月十日請訓  
十四年七月廿日訓示

第百九十二條

第百七十一條

證人ハ豫審

呼出狀ハ都テ豫審  
判事書記署名  
捺印シテ書記局  
ヲ經由ス

鑑定人ハ書記局ヨリ呼出狀ヲ以テ呼出ストアリ証  
人ハ第百七十一條ニ豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ呼出  
ストアリ然ラハ証人呼出狀ハ書記局ヲ經由テ豫審  
判事ノ署名捺印ヲ以テ送達シ鑑定人ノ呼出狀ハ  
豫審判事ノ署名ヲ要セス書記ノ署名捺印ノミ  
ニテ送達スヘキモノ歟「訓示」呼出狀ハ都テ豫  
審判事書記署名捺印シテ書記局ヲ經由  
スヘキ者トス

判事ノ名ヲ以テ之ヲ呼出  
ス可シ但其呼出狀ハ第百  
七十一條ノ規則ニ從ヒ之ヲ送  
達ス可シ  
若シ證人管轄地外ニ在ル  
時ハ其所在ノ地ノ輕罪裁  
判所書記ニ送達ノ事ヲ囑  
託ス可シ



司法警察官の罰  
金ヲ言渡スルヲ得ス

囑託ヲ受ケタル司法警察官ハ呼出ニ應ゼサル証人ニ對シ拘引状ヲ發スルヲ得ルモ罰金ヲ言渡スルヲ得ヌ四罰金ヲ言渡スルハ輕罪裁判所ニ訴ス

石川縣 十四年十月廿六日同  
十五年一月十三日同 本年第四十六号公布第六

第七十二條 豫審判事

項治罪法第六十八條第七十二條ノ例ニ依テ司法警察官其囑託ヲ受タルキハ豫審判事ノ行フハキ一切ノ職權ヲ行ヒ得ヘキヤ「指令」同ノ通但罰金ヲ言渡スルヲ得ス

ハ證人裁判所々在ノ地ニ住マサル時ハ其住所ノ地ノ治安判事ニ訊問事ヲ囑託スルヲ得

長崎縣 十一年一月十一日同 客年第四十六号御布告

若シ證人管轄地外ニ在

以テ中畧 右囑託ヲ受ケタル官吏ハ於テ証人ヲ呼出シタル時其呼出ニ應ゼサル時ハ直ニ拘引状ヲ發シ不苦候哉果シテ然ラハ該句引状ト俱ニ罰金言渡書ヲ送達シテ苦シカラス候ヤ「指令」囑託ヲ受ケタル司法警察官ハ治罪法第七十六條ニ從テ呼出ニ應ゼ

ハ囑託ヲ受ケタル判事ノ名ヲ以テ其裁判所ノ書記局ヨリ之ヲ送達ス可シ

サレ証人ニ對シ勾引状ヲ發スルヲ得然レモ罰金ヲ言渡スルヲ得ス但罰金ヲ言渡スル者ハ輕罪裁判所

証人訊問

証人訊問

第七十二條

法律



ニハ山許スヘレ

三重縣十五年一月廿五日同(上署)司法警察官ニ於テ

豫審判事ノ囑託ヲ受ケ証人ヲ訊問スル呼出狀送達

方ハ其呼出狀ヲ發スル警察署ノ小使又ハ一時雇ノ者

ヲシテ換用シ可然哉若シ其呼出ニ應セサル者ハ再度

ノ呼出狀ヲ發シ又ハ直向引狀ヲ發シ訊問シタル後其

呼出ニ應セサル罰金ヨ言渡スト否トノ處分ハ訊問

書ト共ニ豫審判事ヘ還付スヘキ儀ト相心得可然

哉、指令一 同之通

十四年四月第百四拾号布告

治罪法第百六十八條第

百七十二條ニ於テ治安判事

ニ囑託スルコトヲ許シタル處

分ハ當分ノ内其地司法

警察官ニモ囑託スルコトヲ

得

司法警察官囑託ヲ  
受ケ証人訊問ヲ為ス  
ニ其呼出ニ應セサル者ハ  
再度ノ呼出狀ヲ發シ  
又ハ直向引狀ヲ發シ  
訊問シタル後其呼出  
ニ應セサル罰金ヨ言  
渡スト否トノ處分ハ  
訊問書ト共ニ豫審  
判事ニ還付ス



証人呼出狀ニ記問  
スヘキ事件ヲ記載ス

岡山始審廳判事

十四年十二月廿八日請訓  
十五年一月十九日訓示

今般本省 第七十三條

呼出狀ニ

丁第二十八号ヲ以テ送達書呼出狀等ノ雛形御達

ハ證人ノ氏名住所及ヒ

相成候処証人呼出狀ノ雛形ニ右云々ノ事件ニ付証人

職業ヲ記載ス可シ

トシテ云ヤト有之候抑モ治罪法中証人ヲ呼フ其

又出頭ノ日時場所及ヒ呼

證スヘキ事件ヲ豫メ通知スル規則ナキノミナラス

出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言

豫審ノ主義ハ密行ニアリ且ツ公判ニ於テモ治罪

渡シ且勾引スルコトアル可キ

法第二百八十八條ノ如キ規則アリテ可成陳述

旨ヲ記載ス可シ

前其証明スヘキ事件ヲ知ラシメサルノ法意ト解シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ

候果シテ然ラハ豫メ其事件ヲ通知スルハ豫審上

間少クトモ二十四時ノ猶豫

當ニ益ナキノミナラス却テ多少ノ弊害ヲ生セン就

アル可シ

テハ彼ノ丁第二十八号御達ヲ熟覽スルニ書式別紙

ノ通相定候條右ニ照準スヘシトアリテ一般大體ヲ

示スニ止リ寸分之ニ違ハサルヲ要スル御趣意ノ様ニ

証人訊問

第七十三條

岡山始審廳

岡山始審廳



不被存是故ニ止々証人タルヲ通知シテ其事件  
ヲ通知セサルモ差向無之哉「訓示」証人呼出状ニハ  
訊問スヘキ事件ヲ記載スヘシ

証人

第七十四條 証人疾病  
公務其他正當ノ事故ニ  
因リ呼出ニ應スル能ハ  
サルヲ証明シタル時  
ハ豫審判事其所在ニ就  
テ之ヲ訊問ス可シ

証人訊問

第七十四條

証人



第百七十五條 証人ト為  
 ル可キ者陸海軍在營ノ  
 軍人軍属ナル時ハ其所  
 属長官ヲ經由シテ呼出  
 狀ヲ送達ス其長官ハ即  
 時ニ出庭セシム可キヲ  
 認可シ又ハ職務上已  
 ムトヲ得サル差支アル  
 時ハ其事由ヲ付シテ出  
 廷ノ延期ヲ豫審判事ニ  
 請求ス可シ



屬託ヲ受ケタル司法警察官ハ罰金ヲ言渡シカスヲ得ヌ

檢事及ヒ被告人証人ハ其言渡ニ對シ上告スルコトヲ得

兵庫縣十四年十月八日付本年第四十六号布告中略

第百七十六條 豫審判事

此場合ニ於テハ司法警察官トシテ治罪法第百

八前二條ニ定メタル差

七十六條証人呼出ニ應セサルハ罰金ヲ言渡第百

支ノ場合ヲ除クノ外證

八十三條証人宜拒言ヲ肯セス又ハ宜拒言シテ陳

人呼出ニ應セサル時ハ

述ヲ肯セサルハ刑法第百八十條ニ從ヒ罰金ヲ

檢事ノ意見ヲ聽キ二円

言渡治罪法第百八十五條証人ヲ犯所ニ同行セント

以上十円以下ノ罰金ヲ

シ肯セサルハ罰金ヲ言渡等總テ豫審判事ト同一

言渡ヌ可シ但其言渡ニ

權限ヲ有スル儀ニ有之候哉 相令 司法警察

對シテハ故障及ヒ控訴

官ハ罰金ノ言渡ヲ為スヘカラサル者ト心得ヘシ

ヲ許サス

松山始審廳判事十四年十二月十三日請訓治罪法第

豫審判事ハ其証人ニ對

百七十六條ノ初項ニ於テ檢事ノ意見ヲ聽カスシテ

シ罰金ノ言渡書ト共ニ

罰金ノ言渡ヲ為シ又ハ其罰金ノ範圍ヲ脱シタル言

再度ノ呼出狀ヲ送達シ

渡アリタルハ同法第四百十條第六項ニ準據シ檢事

又ハ直チニ勾引狀ヲ發



ヨリ之ヲ上告為スヲ得ヘキ儀ニ有之候哉果  
 シテ然レハ其四罰金ノ範圍ヲ超過シテ言渡アリタ  
 ル場合ニ於テハ証人モ亦上告為スヲ得ヘキ儀ニ有  
 之候哉 公判ニ於テハ終審對審裁判言渡ニアラサルヨリハ上  
 告ヲ許サルモ又故障ノ途アリ本条ハ終審ノ言渡  
 ニ似テ欠席ナレバ故障ヲ許サス只第七七条ノ變例アル耳故  
 ニ之ヲシテ通常公判ノ言渡トハ一般視ス可カラサル者ノ如シ因テ  
 本文ノ疑團ヲ然レハ則チ其第四百十條ノ被告人ト有  
 生スル所以ナリ  
 之内ニハ証人(第九十二條ニテ)等モ包含セシ者ト解  
 釈スヘキ乎又ハ右第七十六條ハ豫審公判等例  
 ニアラス全ク一種特別ノ處分ニシテ檢事及ヒ証人  
 ヲリ之ヲ上告為スヲ許サル儀ニ有之候哉「訓  
 示」治罪法第四百十條ノ被告人トハ罰金ノ言  
 渡ヲ受ケタル証人ヲモ含蓄ス故ニ檢事及ヒ被告  
 人(即チハ其言渡ニ對シ上告スルヲ得  
 証人ヲシテ之ヲ擔當セ  
 シム  
 若シ証人再度ノ呼出ニ  
 應セサル時ハ二倍ノ罰  
 金ヲ言渡シ且勾引狀ヲ  
 發スルヲアル可シ

二十四時ノ猶豫ヲ與  
 ヘスシテ呼出シタル者  
 ハ罰金科料ヲ言  
 渡スヘカラス

罰金ヲ言渡スハ  
 檢事ハ意見ヲ答ル  
 迄ニテ其言渡ニ立  
 會ヲ要セス

敬言察使ニ於テ犯罪  
 事件急速ヲ要スル  
 場合ニ於テハ治罪法ノ  
 定式ヲ踐マス告知票  
 ヲ以テ証人等ヲ呼出

愛媛縣十四年十二月廿六日付本年第四百四号公  
 布ニ依リ違警罪裁判所ニ於テ証人鑑定人  
 等呼出ノ節治罪法中ノ時間即チ二十四時  
 ノ猶豫ヲ與ヘスシテ呼出スルモ若シ出頭セサル片  
 ハ法ニ依リ科料言渡ヲ為シ不苦儀ニ有之候哉  
 「指令」猶豫ヲ與ヘスシテ呼出シタル者ハ罰金科  
 料ヲ言渡スヘカラス

名古屋始審廳檢事十五年一月十日付豫審判事  
 証人鑑定人へ罰金ヲ言渡スハ檢事ハ意見ヲ  
 答ル迄ニテ其言渡ニ立會ヲ要セサル儀ト心得  
 可然哉「指令」伺ノ通

警視廳十五年二月十日付敬言察使ニ於テ犯罪事  
 件ニ付急速ヲ要スル場合ニ於テハ治罪法ノ定式

證人訊問 第七十六條ノニ

司 法 省



スヲ得其告知ニ應セ  
サルモ第百七十六條ニ  
從ヒ處分スルヲ得ス

ヲ踐マス左ノ書式ノ告知票ヲ以テ証人等ヲ呼出シ  
即時訊問致シ可然哉

住所族籍 姓名

右何々犯罪事件ニ付訊問ヲ要スル儀有  
之ニ付即時出頭可致候事

年月日 何警察使 警察使何某

指令」伺ノ通 但訊問ヲ要スル儀云々ヲ相尋  
ル儀云々トス可シ若シ其告知ニ應セサルモ治罪法  
第百七十六條ニ從ヒ處分スルヲ得サルハ勿論  
ノ儀ト心得ヘシ

証人  
姓名  
住所

証人訊問

証人  
姓名  
住所



罰金ノ言渡ヲ取消  
シタル場合ニ於テハ  
控訴ヲ許サス檢  
事ノ意見ヲ聽カサ  
リシハ其取消ノ  
處分ニ對シ檢事ヨ  
リ上告スルヲ得証  
人ノ出廷スル能ハサル  
事由ヲ証明スル期  
限ハ三日ナリトス

松山始審廳判事

十四年十二月十三日請訊  
十五年一月十二日訓示

第一百七十七條

第一百七十七條

豫審判事

條ニ於テ前條

第一百六十六條

ノ罰金言渡ヲ取消シタル片

ハ證人初度又ハ再度ノ

檢事ニ於テ其理由ナシト認ムル片ハ之ヲ輕罪裁判

呼出狀ヲ受ケサルト其

所ノ始審裁判アリシ場合ト一般ニ看做シ控訴裁判

呼出狀第百七十三條ノ

所へ控訴スルヲ得ヘキ儀ニ有之候哉

其取消ヲ聽許セサル場合ニ於テ

規則ニ背キタルト又ハ

ハ証人ヨリ之ヲ控訴スルヲ得ヘキ乎

畢竟右ハ事實ニ係ル

豫知シ難キ正當事故

判決ナルヲ以テ其上告ヲ許サルハ勿論ナレモ若シ

アリテ出廷スル能ハサ

其取消ニ付豫メ檢事ノ意見ヲ聽カサル場合ニ於

リシトテ證明シタル時

テハ法律ニ背戻スルヲ以テ檢事ヨリ直チニ之ヲ上告

ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其

スルヲ得ヘキ儀ニ有之候乎又ハ法律ト事實ノ差

罰金ノ言渡ヲ取消ス可

別ナク渾テ上告ハ許サルトノ精神ニ有之候哉

シ

又本條ノ出廷スル能ハサリシトテ証人ヨリ証

明スルヲ得ヘキ期限ハ同法第百九十四條ニ準

明スルヲ得ヘキ期限ハ同法第百九十四條ニ準

證人訊問

第百七十七條

同法第百七十七條



據シ三日内ノ期限ト為ス乎又ハ無期限タル乎  
 若シ果シテ之ヲシテ無期限タラシメハ前條第七百七  
十條  
 ノ言渡ハ幾日ヲ待テ確定スヘキヤ或ハ其期  
 限ナキヲ以テ言渡後即時ヨリ之ヲ執行スル  
 ヲ得ヘキ儀ニ有之候哉「訓示」罰金ノ言渡ヲ  
 取消シタル場合ニ於テハ控訴ヲ許サス然レ  
 氏檢事ノ意見ヲ聽カサリシキハ其取消ノ處  
 分ニ對シ檢事ヨリ上告スルヲ得ヘシ但証人ニ  
 於テ出廷スルヲ能ハサリシ事由ヲ證明スルノ  
 期限ハ三日ナリトス







第百七十九條 豫審判事

ハ證人トシテ呼出シク  
ル者ニ對シ其氏名年齢  
職業住所及ヒ第百八十  
一條ニ記載シタル者ナ  
リヤ否ヲ問フ可シ



第一百八十条 豫審判事ハ

證人ヲシテ愛憎畏懼ノ  
心ナク正實ニ陳述ヲ為  
ス可キヲ宣誓セシム  
可シ  
豫審判事ハ證人ニ宣誓  
書ヲ讀聞カセ之ニ署名  
捺印セシム若シ署名捺  
印スルヲ能ハサル時ハ  
其旨ヲ附記ス可シ  
宣誓書ハ訴訟書類ニ添  
置ク可シ



私訴ノ推ヲ拋棄ス  
ル被害者及ヒ其親  
屬ハ証人ト為ルヲ得

仙臺裁判所判事

十三年十二月十日請訓  
十四年七月廿日訓示

第一百八十一條 左ニ記載

一條ニ於テ民事原告人及ヒ其親屬等ハ証人タルヲ  
許サル明文アリテ被害者ニ及ハサルハ私訴ノ推ヲ  
拋棄シ民事原告人ト為ラサル被害者及ヒ其親屬  
等ハ証人ト為ルヲ許セシモノ歟或ハ民事原告人ナル  
名稱ハ此場合ニ限り單純ノ被害者モ含蓄セシ  
文詞ナル哉「訓示」民事原告人ノ名稱ノ起ルハ私  
訴ヲ為スニ因レリ現ニ私訴ヲ為ス者ヲ以テ証  
人ト為ルヲ許サス故ニ私訴ノ推ヲ拋棄スル被  
害者及ヒ其親屬ハ証人トナルヲ得ヘシ

シタル者ハ證人ト為ル  
トヲ許サス但事實參考  
ノ為メ其陳述ヲ聽ク  
ヲ得  
一民事原告人  
二民事原告人及ヒ被告  
人ノ親屬  
三民事原告人及ヒ被告  
人ノ後見人又ハ是等  
ノ者ノ後見ヲ受クル  
者

四民事原告人及ヒ被告



人ノ雇人

事實參考ノ為ニ陳述セシムヘキ者ト雖モ証人同様旅費日當ヲ給ス

岡山始審廳檢事十五年二月十九日同治罪法第百八十二條 左ニ記載

八十二條ノ参照人事實參考ノ為ニ陳述セシムヘキ者ヲ指シタルモノナランシタル者亦前條同シ

ニハ旅費日當ヲ給スル哉「指令」事實參考 一十六歳未滿ノ幼者

ノ為メ陳述セシムヘキ者ト雖モ証人同様旅費日 二知覺精神ノ不充分ナ

當ヲ給スヘシ 電報 ル者

三瘖啞者

四公権ヲ剝奪セラレ又

ハ公権ヲ停止セラレ

タル者

五重罪事件ニ付キ重罪

裁判所ニ移スノ言渡

ヲ受ケ又ハ重禁錮ノ

刑ニ該ル可キ輕罪事

證人訊問 第百八十二條

同法省



件ニ付キ公判ニ付セ  
ラレタル者

六現ニ陳述ヲ為ス可キ  
事件ニ付キ曾テ訴ヲ  
受ケ其證憑充分ナラ  
サルニ因リ免訴ノ言  
渡ヲ受ケタル者

仙臺裁判所判事

十三年十二月十日請訓  
十四年七月廿日訓示

第百八十三條

證人宣誓

代言人云々ハ乃キ職  
業上ニ於テ託セラレ  
タル秘密ノ事件ニ付  
陳述ヲ拒ムモ法律  
ノ罰スル所ニアラス

末項ニ秘密ノ事件ニ付委託ヲ受ケタル者云々ト  
アルハ譬ヘハ代言人ノ如キ詐偽ノ証書ヲ以テ詐  
明カシテ代言ノ囑託ヲ受ケタルモ其不良ナルヲ知テ

ヲ肯セス又ハ宣誓シテ  
陳述ヲ肯セサル時ハ豫  
審判事檢事ノ意見ヲ聽  
キ刑法第百八十條ニ從

之ヲ拒絶シタル片其委託人ヨリ詐偽ノ情ヲ  
他ニ洩スナキヲ託セラレ他日証人トシテ訊問ヲ

ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但  
其言渡ニ對シテハ故障  
及ヒ控訴ヲ許サス

受ルモ其代言人ハ該條ニ照シ之レカ陳述ヲ  
拒ムコトヲ得ヘキ哉或ハ該條秘密ト稱スルハ

醫師藥商穩婆又ハ代言  
人辯護人代書人公證人

其職業上ニテ秘スヘキ事件ヲ指示シタル  
者ニテ法律ノ罰スヘキ所為ヲ掩蔽スルカ如キ

若クハ神官僧侶其身分  
職業ニ関スル秘密ノ事

密事ヲ指示シタル者ニ非サル歟「訓示」代言  
云々ハ乃キ職業上ニ於テ託セラレタル秘密ノ事件

件ニ付キ委託ヲ受ケタ

ニ付陳述ヲ拒ムモ法律ノ罰スル所ニアラス



第百八十三條ニテ罰金ノ言渡ヲ受ケタル中モ上告スルヲ得

松山始審廳判事

十四年十二月十三日請訓  
十五年一月十二日訓示

治罪法

ル者ハ前項ノ例ニ在ラ

第百八十三條ニテ罰金ノ言渡ヲ受タル中モ亦

ス

上告ヲ為シ得ヘキ儀ニ有之候哉「訓示」其見解

ノ通

對質ヲ肯セサル者、  
第百八十三條ニ依テ  
處罰ス

仙臺裁判所判事

十三年十二月十日請訓  
十四年七月廿日訓示

第百八十四條

第百八十四條 證人ハ他

條他ノ証人又ハ被告人ト對質スルトアリシモ若

シ之カ對質ヲ肯セサル者アル中第百八十

三條ニ準シテ罰スルヲ得ヘキ哉或ハ其明文ナ

リトスル時ハ證人ト他

キニ因リ之ヲ罰スルヲ得サル者歟「訓示」第百

八十三條ニ依テ罰スヘシ

事實發見ノ為ニ必要ナ

リトスル時ハ證人ト他

ノ證人又ハ被告人ト對

質セシムルヲ得

質セシムルヲ得

質セシムルヲ得



第一百八十五條 豫審判事  
 ハ證人ノ陳述ヲ確實ナ  
 ラシムル為ノ必要ナリ  
 トスル時ハ重罪輕罪ノ  
 犯所又ハ其他ノ場所ニ  
 同行スルヲ得  
 若シ證人同行スルヲ  
 肯セサル時ハ第七十  
 六條ノ規則ニ從ヒ罰金  
 フ言渡ス可シ



証人訊問  
法律

第一百八十六條 第一百五十  
六條 第一百五十七條ノ規  
則ハ 証人ニ付テモ亦之  
適用ス

証人訊問

第一百八十六條

同法



証人訊問

第一百八十七條 皇族又ハ

勅任官證人ナル時ハ豫

審判事書記ト共ニ其呀

在ニ就テ陳述ヲ聽ク可

ニ

証人訊問

第一百八十七條

同法省



証人記開  
第百八十八條

第百八十八條 書記ハ證

人ノ陳述ニ付キ各別ニ

調書ヲ作ル可シ

其調書ニハ證人宜誓テ

為ニタルヲ又ハ為サハ

ルノ事由ヲ記載ス可シ

証人記開

第百八十八條

調書



三  
法  
書

第百八十九條 豫審判事

ハ證人ニ其陳述ノ相違

キキヤ否ヲ知ラシムル

為メ書記ヲシテ調書ヲ

讀聞カセシム可シ

證人ハ其陳述ヲ變更増

減セシムヲ請求スルヲ

得書記ハ其請求アリタ

ルト及ビ變更増減ノ條

件ヲ調書ニ記載シ豫審

判事及ビ證人ト共ニ署

名捺印ス可シ若シ證人

署名捺印スルト能ハサ

證人訊問

第百八十九條

司  
法  
省



ル時ハ其旨ヲ附記奇  
シ

第二項旅費日當ノ  
外日稼高ニ等シキ償  
金ヲ要ムル場合同  
一ノ生業ヲ為ス者ノ  
稼金ノ例ニ因リ或ハ  
評價人ニ評價セシ  
ムル等徳ヲ裁判官  
ノ見込ニ任ス但其費  
用ハ第三百七條ニ依  
リ處分ス

般石井始審廳判事外五名十四年五月十八日請訓治  
罪法第百九十條第二項日稼ヲ以テ生業トスル者ニ  
旅費日當ノ外日稼高ニ等シキ償金ヲ定メ豫審判  
事言渡ヲナスニハ其呼出人住所ノ日稼金ニ比較計算  
シ其額ヲ定ムルキ乎又ハ假令ハ其証憑ヲ要シ即  
チ評價人ヲ呼出シ之レニ計量セシメ其評價料ハ  
官費ニ歸スヘキ乎「訓示」日稼高ヲ定ムルニハ本人ノ  
申立ニ因リ或ハ戸長ノ申立書ニ因リ或ハ同一ノ生  
業ヲ為ス者ノ稼金ノ例ニ因リ或ハ評價人ニ評價セシ  
ムル等總テ裁判官ノ見込ニ任ス但其評價料  
ハ裁判費ニ屬スルヲ以テ治罪法第三百七條ニ  
依リ處分ス

第百九十條 証人ハ即時  
ニ出廷ニ付テノ旅費日  
當ヲ要ムルヲ得  
若シ日稼ヲ以テ生業ト  
スル者ナル時ハ旅費日  
當ノ外日稼高ニ等シキ  
償金ヲ要ムルヲ得  
本條ノ場合ニ於テハ豫  
審判事其金額ヲ定メ之  
ヲ言渡ス可シ

第百九十條ノ処分  
法警察官モ之ヲ為  
スルヲ得

大分縣十四年十二月廿三日付治罪法第百九十條ニ  
關シ

同  
法  
省



証人ノ旅費日當等ハ豫審終結後ト申  
 正被告人ニ對シ裁判  
 費用ノ言渡アル迄  
 ハ之ヲ請求スルヲ得

証人ノ旅費日當及ヒ其証人日稼ヲ以テ生業ト為  
 ス者ノ要償ハ豫審判事其金額ヲ定メ言渡  
 スヘントアリ司法警察官モ亦此處分ヲ為ス  
 得ル儀ニ候哉「指令」伺ノ通

盛岡始審廳判事十五年一月廿三日付治罪法第

百九十條ニ証人ハ中畧又刑法附則第五十條証人ノ

旅費日當及ヒ止宿料ハ本人ノ請求アルニ非サレハ之ヲ

給與セストアリ然レハ右旅費日當ハ即時請求スルニ

非サレハ給與セサルモノナル乎又ハ公判言渡アル迄何

時ニテモ請求ニ從ヒ給與スルモノ乎或ハ豫審終結

後ニ至リ豫審中ノ費用ヲ請求スル類ハ其費用

ヲ給與セサルトノ區別ヲ立ツヘキ乎「指令」証人ノ

旅費日當等ハ豫審終結後ト申正被告人ニ對

シ裁判費用ノ言渡アル迄ハ之ヲ請求スルヲ得  
 ル儀ト心得ヘシ



證人訊問

同  
法  
官

同  
法  
官



第七節 鑑定

第百九十一條 豫審判事

ハ犯罪ノ性質方法及ヒ  
結果ヲ分明ナラシムル  
為メ鑑定人ヲ必要ナリ  
トスル時ハ學術職業ニ  
因リ鑑定スルコトヲ得可  
キ者一名又ハ數名ラシ  
テ鑑定ヲ為サシム可シ



猶豫ヲ與ヘスレテ呼出  
ニタル者ハ罰金料  
ヲ言渡ス可カラス

鑑定人ニ對ニタル罰  
金ノ言渡ハ第百七十  
七條ニ依リ取消ス  
ヲ得

愛媛縣

十四年三月廿六日  
十五年一月十九日付

本年第四十四号公布

第百九十二條 鑑定人ハ

ニ依リ違言罪裁判所ニ於テ証人鑑定人等呼出

書記局ヨリ呼出狀ヲ以

ノ節治罪法中ノ時間即ケ二十四時ノ猶豫ヲ與ヘ

テ之ヲ呼出ス可シ其呼

スニテ呼出ス片モ若シ出頭セサルキハ法ニ依リ料

出狀ニハ犯罪事件ニ付

料言渡ヲ為シ不苦儀ニ有之候哉 指令 猶豫

キ鑑定ヲ命スルノ及ビ呼出

ヲ與ヘハシテ呼出ニタル者ハ罰金料ヲ言渡ス

ニ應セサル時ハ罰金ヲ言

可カラス

渡ス可キヲ記載ス可シ鑑

福岡縣 十四年十二月九日 治罪法第百九十七

定人呼出ニ應セサル時ハ

條 鑑定人呼出ニ應ヒサルキハ第百九十三條ノ

第百七十六條ノ規則ニ從

規則ニ從ヒ處分スヘシトアリ然ルニ第百九

ニ處分ス可シ但勾引狀

十三條ノ証人ハ已ニ罰金ノ言渡ヲ受クルト雖モ

ヲ奈スルノヲ得ス

其出廷スルノ能ハサリシ正當ノ理由ヲ証明シ

第百七十七條ノ規則ハ本

タルキハ第百九十四條ヲ以テ右言渡取消ノ明

條ニモ亦之ヲ適用ス



條アリテ鑑定人ニハ其取消ノ成文ナキモ正当ノ理  
由ヲ証明シタルハ証人同様第百九十四條ニ  
依リ處分シ可然哉 指令第百九十七條ニ  
第百九十一條以下ノ規則ハ公判ニ於テ新ニ命  
シタル鑑定人ニモ亦之ヲ適用ストアリ又第百  
九十二條第三項ニ第百七十七條ノ規則ハ本條ニ  
モ亦之ヲ適用ストアルニ因リ鑑定人ニ對シタ  
ル罰金ノ言渡ハ第百七十七條ニ依リ取消ス  
者ト心得可シ

証人  
同様  
指令  
第百九十七條

鑑定

同  
様  
指  
令



鑑定

第百九十三條

司  
書  
省

第百九十三條 鑑定人ハ  
 正實ニ鑑定ス可キノ宜  
 誓ヲ為ス可シ其宜誓ハ  
 第百八十條ノ式ニ從フ  
 書記ハ鑑定人ノ宜誓シ  
 シルヲ鑑定命令書ノ  
 紙尾ニ記載シ之ニ宜誓  
 書ヲ添置スヘシ

司  
書  
省



豫審判事罰金ヲ言渡  
又ハ檢事意見ヲ答ル  
ニテ其言渡ニ立會ヲ要セ

名古屋始審廳檢事

十五年一月十一日同  
同年同月廿六日付

豫審判事

第一百九十四條

鑑定人宜

証人鑑定人ハ罰金ヲ言渡スハ檢事ハ意見ヲ

誓ヲ肯ニス又ハ宜誓シ

答フル迄ニテ其言渡ニ立會ヲ要セサル義ト心得

テ鑑定ヲ肯セサル時ハ

可然哉指令伺ノ通

豫審判事檢事ノ意見ヲ

聽キ刑法第一百七十九條

ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可

シ但其言渡ニ對シテハ

故障及ヒ控訴ヲ許サス

鑑定

第一百九十四條

同條



法部省

第百九十五條 第百八十  
一條第百八十二條ニ記  
載シタル者ニハ鑑定ヲ  
命スルヲ得ス但急遽  
ノ際正當ノ鑑定人ト為  
ル可キ者ナキ時ハ事實  
參考ノ為メ鑑定ヲ命ス  
ルヲ得

鑑定

第百九十五條

同業省



鑑定

第一百九十六條

同條省

第一百九十六條 豫審判事  
ハ成ル可ク鑑定ニ立會  
フ可シ

同條省



鑑定

第百九十七條

司  
錄  
省

第百九十七條 豫審判事  
 ハ鑑定人ノ請求ニ因リ  
 又ハ職権ヲ以テ鑑定人  
 ヲ増加シ又ハ別人ヲシ  
 テ鑑定セシムルヲ得

司  
錄  
省



第百九十八條 鑑定人ハ  
 鑑定書ヲ作り其手續結  
 果及ヒ鑑定ヲ為シタル  
 時間ヲ詳記ス可シ  
 若シ結果ヲ得カル時ハ  
 其推測スル所ヲ記載ス  
 可シ  
 鑑定人意見ヲ異ニスル  
 時ハ各自鑑定書ヲ作り  
 又ハ各自ノ意見ヲ一箇  
 ノ鑑定書ニ記載スヘシ

同業會  
 法  
 規



鑑定書ニ豫審判事紙尾  
ハ何年月日捺印スト記載  
シ署名捺印ス

般若并始審廳判事外五名四年十月十六日請訓  
同年十二月廿七日訓示第一百九  
十九條ノ鑑定書ニ豫審判事捺印スルニ假令何  
年何月何日受取ト末記シ書記ト共ニ捺印スル  
ニテ不苦乎「訓示」紙尾ニ何年月日捺印スト記  
載シ署名捺印スヘシ

第一百九十九條 鑑定人ハ

鑑定書ニ年月日ヲ記載

シ署名捺印及ヒ契印ス

可シ

又鑑定書ニハ豫審判事

之ヲ受取リタル年月日

ヲ記載シ書記ト共ニ捺

印ス可シ

鑑定書ハ鑑定命令書ニ

添置ク可シ

外國人鑑定ヲ為シタル

時ハ其鑑定書ニ裁判所

ヨリ命シタル通事ノ作

鑑定

第一百九十九條

同 條 旨



第二百條 鑑定人及通  
事ニハ旅費給料其他相  
當ノ費用ヲ給與ス可シ

リタル譯本ヲ添置ス可  
シ



第二項ノ令状爲引  
状句留状ヲ指ス

仙臺裁判所判事

十三年十二月十日請訓  
十四年七月廿三日訓示

第二百一條

第八節

現行犯ノ

末項ニ令状云々トアルハ收監状ニ含蓄スルモノ歟

豫審

果シテ然ラハ檢事ノ意見ヲ聽カスレテ之ヲ發スル

第二百一條 豫審判事

ヲ得ヘキ哉或ハ該令状ハ召喚状拘引状拘留状ノ

ハ檢事ヨリ先ニ現行

ニテ指示シタルモノ歟 訓示拘引状拘留状ヲ指

ノ重罪輕罪アルヲ

ス

知リタル場合ニ於テ

其事件急速ヲ要スル

時ハ檢事ノ請求ヲ待

タス直チニ其旨ヲ通

知シ豫審ニ取掛ル

ヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨

檢シ令状ヲ發シ其他



此章ニ定ノタル規則ニ  
從ヒ豫審ノ処分ヲ為ス  
ト得

未項ノ場合豫審判  
事及書類ヲ速ニ還付セ  
ルヲ檢事ニ促ス

仙臺裁判所判事

十三年三月十日請訓  
去年七月廿日訓示

第二百二條ノ

第二百二條

前條ノ場合ニ

未項ニ意見アリトモ云々トアリ檢事ニ於テ豫審

於テハ檢事ノ起訴ナシトモ

ヲ繼續スヘキ者ニ非スト為シタルハ幾日限り其書

モ豫審判事檢證調書ヲ

類ヲ還付スヘキ者ナル或ハ別ニ其時間ヲ定メ

作ルヲ以テ公訴受理シタル

タル明文ナケレハ幾数ノ日トモ檢事ノ還付ア

者トス其調書ニハ現行ノ重

ルヲ待ツヘキ者歟一訓示一其書類ヲ速ニ還付

罪又ハ輕罪ナルヲ記載ス可シ

セシトテ促スヲ要ス

豫審判事ハ速ニ書類ヲ

檢事ニ送致ス可シ但檢事

ヨリ其豫審手續ヲ繼續

ス可キ者ニ非サルノ意見

アリト雖モ通常ノ規則ニ

從ヒ之ヲ終結ス可シ



現行犯ノ豫審

同  
集  
録

同  
集  
録



第二百三條の場合ニ於テ  
モ書記ノ立會ヲ要ス

檢事犯所ニ臨檢スルハ  
急遽ノ際書記ノ同伴ヲ  
得ル能ハサル場合ヲ除ク外  
書記ノ同伴ス

檢事若シ書記ノ立會  
ヲ得ル能ハサル時ハ急  
立會人ヲ要ス


仙臺裁判所判事十三年十一月十四日請示 第二百三條 檢事ハ豫審判事  
ヨリ先ニ現行ノ重罪軽罪  
アルヲ知りシル時ハ豫審判  
事ヲ待ツトナク其旨ヲ通

仙臺始審廳檢事十四年十一月廿五日付 現行犯アル當  
事ニ屬スル處分ヲ為ス  
ヲ得但罰金ノ言渡ヲ為ス  
ヲヲ得ス  
證人及ヒ鑑定人ノ陳述ハ  
宣誓ヲ用フルヲ可シ  
聽ク可シ

豊岡治安廳檢事十四年十一月七日付 治罪法第二百  
三條ニ中略 本條ノ場合檢事ハ第百四十八條ノ法  
文ニ從ヒ必ス書記ヲシテ立會ハシメ若シ立會ヲ



得不能ハル時ニ於テハ二名ノ立會人ヲ要スル儀ニ  
候哉「指令」同ノ通

〔彦根始審廳檢事〕十五年一月廿日請訓  
全年二月九日訓示治罪法第

檢事第百三條第  
二百六條ヲ履行スル場合  
第百四十八條ニ依リ知分ス

百三條中右處分ヲ為スハ豫審判事カ為ス手續  
ニ依ラサレハ固ヨリ其効ナキハ論ヲ待タス而シテ豫審  
判事ノ被告人ヲ訊問シ又ハ檢証處分ヲ為スニ書記立  
會調書ヲ作ルヲ必用ト為スハ載セラ治罪法ニ三條  
アリ故ニ檢事ニ於テ右臨檢及ヒ第百六條ノ場  
合ヲ為スニ當リテ書記ノ立會ヲ要シ調書ヲ作ラサ  
ルヲ得サル者ノ如シ然レモ治罪法ニ正文ナキヲ以テ檢  
事自ラ調書ヲ作ルヘキ者ト為ス歟將テ書記ノ  
立會ヲ要スルヲ當然ト為ス歟「訓示」治罪法第  
百四十八條ニ依リ處分ス

現行犯ノ豫審

同  
法  
第  
百  
四  
十  
八  
條



第二百四條ノ場合ニ  
於テ檢事無罪ト  
認メタルハ第百  
七條末項ノ者ハ直  
放免ス

仙臺裁判所判事  
十三年十月十四日請訓  
十四年七月廿三日訓示  
第二百四  
條ノ場合ニ於テ檢事自ラ無罪ト認メタルハ第  
百七條ノ末項ニ照シ直ニ放免スルヲ得ヘキ或ハ  
無罪ト認ルモ一應豫審判事ニ送致スヘキモ  
ノ款「訓示」第百七條末項ノ者ハ直ニ放免ス  
ルヲ得ヘシ

第二百四條 前條ノ場合ニ  
於テハ檢事ハ證據書類ニ  
意見書ヲ添ヘ送シ之ヲ豫  
審判事ニ送致ス可シ



準現行犯トモ司法警察官ニテ令状ヲ發スルヲ得

司法警察官ニテ令状ヲ發スルヲ得  
ハ公衆ヲ待タズシテ準現行犯ヲ捕縛スルモ若シキラス

第百五條司法警察官ニテ令状ヲ發スルヲ得  
官現行ノ犯所ニ臨檢ニ被  
告人逃去シタルハ令状ヲ  
發シテ捕縛スルモ若シキ  
ハ公衆ヲ待タズシテ準  
現行犯トモ司法警察官  
ニテ令状ヲ發スルヲ得

茨城県十四年十月十日付

本年第四十六号布告

第二百五條 第二百三條

第六項治罪法第二百五條第一項但書ニ司法警察

ニ於テ檢事ニ許シタル職

察官ハ之ニ當分ノ内現行犯ノ場合ニ限り令状ヲ

務ハ司法警察官モ亦假

令状ヲ發スルヲ得ル儀ト心得可然哉

ニ之ヲ行フヲ得但令状

指令ニテ令状ヲ發スルヲ得ル儀ト心得可然哉

ヲ發スルヲ得ス

指令ニテ令状ヲ發スルヲ得ル儀ト心得可然哉

司法警察官ハ證憑書類ニ意

前條果シテ準現行犯ニモ適用スルモノトセハ司法

見書ヲ添ヘ被告人ト共ニ連

法警察官巡查ハ令状ヲ待タズシテ準現行犯

ニ之ヲ檢事ニ送致ス可シ

ヲ捕縛スルモ不苦儀ト相心得可然哉「指令」

十四年四月廿六号布告治

伺ノ通

罪法第二百五條第一項但

兵庫縣十四年十月八日付治罪法第二百五條司法

書ニ司法警察官ハ令状ヲ發

警察官現行ノ犯所ニ臨檢ニ被告人逃去シタルハ

スルヲ得サル旨記載有之

令状ヲ發スルヲ得ル儀ト心得可然哉「指令」

候得共當分ノ内現行犯ノ

現行犯人豫審

第二百五條ノ一

同法省



法警察官勾引シ  
見付ハ直ニ檢事ニ  
送致ス又ハ急速ヲ要  
スルハ一應訊問ノ上  
檢事ニ送致ス

分終リタルハ証憑書類物件ハ檢事ニ送ルヘキ	場合ニ限り令状ヲ發シ苦シカ
モノト了解セラレテ果シテ然ラハ他日令状ニ	ラス
依リ被告人ヲ司法警察官ノ面前ニ勾引シタル	
ハハ第四百條ニ依リ被告人ノ訊問ヲ為スヘキ者	
ナルヤ又ハ此場合ニ於テハ証憑書類物件ハ既ニ	
檢事ニ送付後ナレハ被告人ノ訊問ヲ為サス直	
ニ檢事ニ送致スヘキ者ニ有之候哉「指令」直ニ	
檢事ニ送致シ又ハ急速ヲ要スルハ一應訊問	
ノ上檢事ニ送致スヘシ	
本年第四百六号布告 <small>中署</small> 令状ヲ發シ苦シカラス	
トアリ而シテ第四百五條ハ固ヨリ現行ノ犯所	
ニ臨檢シタル場合ナルニ特ニ現行犯ノ場合ニ限り	
トアルハ犯所ニ臨檢セサル時トモ令状ヲ發スル	

司法警察官勾引シ  
見付ハ直ニ檢事ニ  
送致ス又ハ急速ヲ要  
スルハ一應訊問ノ上  
檢事ニ送致ス

司法警察官勾引シ  
見付ハ直ニ檢事ニ  
送致ス又ハ急速ヲ要  
スルハ一應訊問ノ上  
檢事ニ送致ス

檢事司法警察官  
収監状ヲ發スル場合  
ナシ

ヲ得ヘキ儀ニ有之候哉「指令」同ノ通	
一福島始審廳檢事 <small>十四年十一月廿五日請訓 十五年一月十三日 訓示</small> 沼罪法	
第二百五條第一項司法警察官現行犯者アルニ	
當リ取調中勾留状ヲ發ス三日ニシテ書類具備	
ニ檢事ニ送致スル途中五日ヲ費セハ其五日ハ除棄	
ニ檢事被告人ヲ受取ル後七日間ハ其勾	
留状ノ効ヲ有スル儀ト心得可然乎「訓示」	
其見解ノ通	
同條檢事司法警察官収監状ヲ發スル場	
合萬々無シトハ存シ候得共若シ不得止場合ニ	
於テハ本年第四百六号公布ニ依リ前顯令状ヲ	
發スルモ不苦儀ト心得可然哉「訓示」收監	
状ヲ發スル場合ナシトス	

現行犯ノ後審 第二百五條ノ二

同 律 省



司法警察官現行犯  
ノ檢証処分ヲシ被  
告人ヲ逮捕スル能マ  
ルハ檢証書類ハ檢  
事ニ送致シ檢事ハ  
豫審判事ニ送致ス但  
檢事起訴不可カ  
ル者ト認メタルハ送  
致スルニ及ハス

云々呼出状ヲ以テ呼  
出シタル者付テハ  
事件ヲ檢事ニ送致  
ス報知書又ハ口述  
ヲ以テ呼出シタル  
者ハ此限ニ  
アラス

司法警察官ヨリ  
夜間又ハ休暇ニ被  
告人ヲ送致シタル  
通報セシハ假ニ被  
告人ヲ最寄監倉ニ留置  
シテ二十四時間内ニ訊問

司法警察官事務ヲ

神戸始審廳檢事 十五年一月廿五日 訓示 請訓書畧之  
「訓示」司法警察官現行犯ノ檢証処分ヲ為シ被  
告人ヲ逮捕スルノ能ハサルハ假ニ付請訓起  
檢証書類ハ檢事ニ送致シ檢事ハ豫審判事ニ  
送致スヘシ但檢事起訴ヲナスカラサル者ト認メ  
タルハ送致スルニ及ハス  
兵庫縣 十五年一月廿五日 訓示 治罪法第二百五條ニヨリ  
司法警察官檢証処分ヲ為スニ付呼出シタル証人  
鑑定人又ハ呼出ニ應セサルモ同第二百三條但書ニ  
依リ罰金ノ言渡ヲナスコトヲ得スト虽モ其呼出ニ  
應ザル者ハ檢事ニ告發スヘキ者ナルヤ又ハ到底  
如罰ノ限ニ無之候哉「指令」正式ノ呼出状ヲ  
以テ呼出シタル者ニ付テハ其事件ヲ檢事

ニ送致スヘシ報知書又ハ口述ヲ以テ呼出シ  
タル者ハ此限ニアラス

米子始審廳檢事 十五年二月十五日 請訓 治罪法

第二百五條第二項ニヨリ司法警察官ヨリ被

告人ヲ送致シタルノ通報アリタル時ハ夜間又ハ

休暇ト虽モ直ニ昇廳被告入ヲ受取り訊問致

シ未候如右ニテハ實際第二百六條ニ於テ與ヘ

ラレタル二十四時間ノ猶豫アラサルノミナラス遠路

送致ノ被告入ニ於テモ深夜訊問ヲ受ケサルヘカニ

ルノ困難之レアルニ付向後如斯場合ニ於テハ假ニ

被告入ヲ最寄監倉ニ留置セシメ二十四時間内ニ

訊問致シ不苦儀ニ候哉「訓示」見込ノ通

平始審廳檢事 十五年二月一日 訓示 司法警察官事務

現行犯ノ豫審 第二百五條ノ三

司法警察官



取扱各村戸長被告人ヲ逮捕シタルハ夜間等ニテ直ニ檢事ト送致シ難キ場合知方

本條ノ場合第百五十一條ノ式ニ從フヘシト雖モ必シモ書記ノ立會ヲ要ス

務ヲ取扱各村戸長ニ於テ重輕罪犯人ヲ逮捕シ	タル場合夜間等ニテ直ニ當官ヘ送致難相成第ハ	廿夜間ニ限り最寄警察署分署交番所ヘ留置	シ又ハ囑託看守セシメ或ハ警察署等無之場所	ニ於テハ時機ニ依リ巡查又ハ相当ノ人ヲ撰ミ看	守セシメ翌日送致ノ手續為取計可然哉「指令	付ノ通	現行犯ノ場合司法警察官ニ於テ治罪法第ニ	百五條第百三條ニ依リ取扱フキ犯罪事件ハ	假ノ處分ナルニ付又調書ニハ治罪法第百五十一	條ノ式ニ依ラス被告人ト取調タル官更ノ署名	捺印シ可然哉「指令」治罪法第百五十一條	ノ式ニ從フヘシト雖モ必スシモ書記ノ立會ヲ
----------------------	-----------------------	---------------------	----------------------	-----------------------	----------------------	-----	---------------------	---------------------	-----------------------	----------------------	---------------------	----------------------

等外吏書記ノ職務ヲ行フタルハ署名捺印ス

司法警察官犯所ニ臨檢シ又ハ其署ニ於テ取調ヲ為ス片ハ書記ハ巡查等ヲ用ヒ之ニ立會ス

要セス	若シ第百五十一條ノ式ヲ履行スヘキ時ハ假令等	外吏タリ片ハ事件ニ干渉シタル者署名捺印	シ可然哉「指令」等外吏書記ノ職務ヲ行フ名	片ハ同ノ通	米子始審廳檢事 <small>十五年二月六日請訓</small> 司法警察官	犯所ニ臨檢シ又ハ其署ニ於テ取調ヲ為ス時ハ書記	ハ巡查等ヲ用ヒ之ニ立會セ可然哉「訓示」	見込ノ通
-----	-----------------------	---------------------	----------------------	-------	----------------------------------------	------------------------	---------------------	------



現行犯ノ豫審

同表省

同表省



第二百六條ノ場合ニ於テ  
 檢事限リ拘留状ヲ發  
 スルヲ得但被告ノ受取  
 タルヨリ豫審判事ニ送致  
 スル迄二十四時ヲ経過ス  
 ルヲ得ス

天津始審廳檢事

十四年十一月廿三日(同)

治罪法

第二百六條 檢事被告

第二百六條 中畧

送致スヘシト有之候是レ司法

人ヲ受取リタル時ハ

警察官現行犯ノ處分終リ証憑書類ニ意見書ヲ

二十四時内ニ之ヲ訊

添ヘ引渡来ルキ一應訊問ヲ為シ被告人ノ罪禁

問シ調書ヲ作り勾留

錮以上ノ刑ニ該ル可キ若ト思料シタル場合ニ

状ヲ發スルト否トヲ

於テハ豫審判事ニ送致セサル以前檢事限リ直

問ハス一切ノ書類ニ

テニ勾留状ヲ發シ得ヘキ精神ヲ含蓄致シ候儀

請求各ヲ添ヘ豫審判

ト心得可然哉僅ニ一兩名ノ人負ニシテ多數ノ

事ニ送致ス可シ

事件ヲ取扱其書類ヲ檢閲シ及ヒ請求書ヲ作ル

若シ起訴ヲ為ス可カ

等多數ヲ要シ即時豫審判事ニ送致スル能

ラサル者ト認メタル

ハサルヲモ往々可有之然ルニ勾留状ヲ發スル

時ハ直ニ被告ノ人ヲ

ト否トノ文意ニ付渙然氷釋致兼候旨令伺ノ趣

放免ス可シ

檢事限リ拘留状ヲ發スルヲ得但被告人ヲ受取

現行犯ノ豫審

第二百六條ノ一

司法省



令状ヲ受ケル被告ハ訊問時間二十四時ノ内夜間ハ裁判所又ハ最寄警察署ノ留置場ニ入レ置

勾留状ヲ發スルト否トハ檢事ノ見込ニ任ス

タルヨリ豫審判事ニ送致スル迄二十四時ヲ起過スルヲ得サル儀ト心得ヘシ

平始審廳檢事十五年一月十三日同 沼罪法第二  
百六條令状ヲ受ケサル犯人訊問前二十四時内ノ夜間ハ何方ニ置クヘキ哉 指令令状ヲ受ケサ  
ル被告人ハ訊問時間二十四時ノ内夜間ハ裁判所又ハ最寄警察署ノ留置場ニ入レ置クヲ得可  
シ

静岡始審廳檢事十五年一月十二日同 沼罪法第  
二百六條 中畧 右二十四時内トハ被告人ヲ受取  
リ訊問シテ豫審判事ニ送致シ又ハ直ニ公判ニ  
付スル迄ノ云ヒニシテ若シ此時間内ニ其手續  
ヲ為サ、ルキハ勾留状ヲ發スルニアラザレハ

被告人ヲ放免スヘキ法文ト見解致シ候然レハ  
檢事カ勾留状ヲ發シ被告人ヲ勾置スルハ其時  
間内ニ起訴スルヲ能ハサル場合ニ於テ止ムヲ  
得ス由<sub>○</sub>為スヘキノ處分即チ非常例ナリ故ニ  
被告人ヲ受取タルヨリ其時間内ハ勿論即時訊  
問シテ直ニ公判ニ付スルニ當リ禁錮ノ刑ニ該  
ルヘキ者又ハ逃亡ノ恐アル者ト思料スルキハ  
固ヨリ現行犯ノ場合ニテ令状ヲ用ヒヌ取押ヘ  
タル被告人ナレハ勾留状ヲ發シテ後チ送致ス  
ヘキモ豫審ニ付スルキハ勾留状ヲ發セス一切  
ノ書類ニ請求書ヲ添被<sub>○</sub>告人ト共ニ送致シ令状  
ヲ發スル等ノ處分ハ常例ニ復シ豫審判事ニ讓  
リ可然ト相心得候ヘキ本條ノ場合ニテハ必檢

現行犯ノ豫審 第二百六條ノ二



差支ル場合ハ書記  
ナキモ妨ナシ

二十四時内休日ニ涉ル  
ハ其翌日取扱フ

事カ勾留状ヲ發シ而シテ後送致ス可キ者ナル  
マ指令伺ノ趣治罪法第二百六條ノ場合ニ於テ  
檢事ハ必ス廿四時内ニ其事件ヲ送致スヘシ但  
勾留状ヲ發スルト否トハ其見込ニ任スル儀ト  
心得ヘシ

宇和島始審廳檢事十五年一月廿四日付治罪法

第二百六條檢事被告人ヲ訊問シ調書ヲ作ルニ

豫審判事ノ處分ヲスルモノナレハ同法第百四

十九條以下ノ式ニ指ヒ各記シテ訊問及ヒ陳

述ヲ録收セシメノ調書ヲ作ル儀ト心得可然哉指

令伺ノ通但差支アル場合ハ書記ナキモ妨ナシ

米澤始審廳檢事十四年十二月廿二日付治罪法

第二百六條中畧二十四時内云々トアリ同第ニ

百七條中畧二十四時内ニ被告人ヲ訊問云々ト  
アリ此場合ニ於テ其時間休日ニ涉リタルニ  
如キモ右等ノ官吏出頭シ事務取扱儀ト心得  
可然哉又ハ休日ニ涉リタルニ限リ翌日其取  
扱ニ及ヒ可然哉但シ休日出頭スル者トセハ該  
事務ニ関スル附屬官吏モ出頭候様兼テ相違置  
可然哉指令其時間休日ニ涉ルニハ其翌日取扱  
フ儀ト心得可シ

平始審廳檢事十五年二月一日付治罪法第十八

條ハ第ニ百六條第ニ百七條ニモ適用致スヘキ

者ト見込可然哉指令伺ノ通

米子始審廳檢事十五年二月六日請訓治罪法第

二百三條ニ據リ檢事犯所ニ臨檢スル場合ニ於

現行犯ノ豫審 第二百六條ノ三

第ニ百八條ノ規則ハ第ニ百  
六條第ニ百七條ニモ適用  
ス

第ニ百六條ノ場合ニ於テ  
ハ書記ナキモ妨ナシ  
要セズ



予書記ノ立會ヲ要スル儀ハ既ニ他ノ裁判所ヘ  
 内訊ノ趣ヲ有之ニ付同法第ニ百六條ニ據リ被  
 告人ヲ訊問スル場合ニ於テモ書記ノ立會ヲ要  
 スルハ勿論ト心得可然我<sup>レ</sup>訊示治罪法第ニ百六  
 條ノ場合ニ於テハ必シモ書記ノ立會ヲ要セス

司  
 法  
 官

現行犯ノ豫審

司  
 法  
 官



第十八條ノ規則ニ第  
百六條第百七條ニ  
適用ス

平心審廳檢事

十五年二月一日付

治罪法第十八

第二百七條 豫審判事

條ノ第百六條第百七條ニモ適用致スヘキ

若ト見込可然哉、指令何ノ通

ハ二十四時内ニ被告

人ヲ訊問ス可シ此場

合ニ於テハ檢事ノ發

シタル勾留状ヲ解キ

又ハ之ヲ存スルヲ

得

現行犯ノ豫審 第二百七條

司 去 八

司 去 八



第二百八條 豫審判事  
 ハ檢事又ハ司法警察  
 官ノ為シタル手續ニ  
 付キ更ニ其取調ヲ為  
 スコトヲ得但檢事又ハ  
 司法警察官ノ作リタ  
 ル調書ハ之ヲ訴訟書  
 類ニ添置ス可シ



第二百九條 檢事ハ輕

罪ノ現行犯ニ係ル場

合ニ於テ勾留状ヲ發

シタルト否トニ拘ハ

ラス被告入ヲ訊問シ

タル後豫審ヲ求ムル

ニ及ハスト思料シタ

ル時ハ直テニ輕罪裁

判所ニ呼出スヲ得



The image shows a blank ledger page with a grid of 12 columns and 2 rows. The grid is formed by solid lines, with a thicker line on the left and right sides. The top row is slightly taller than the bottom row. The page is otherwise blank, with no text or markings.


手  
法  
本



